令和５年度研究助成 【サウンド技術振興部門】より

# 森林空間での音楽演奏が演奏者と聴衆にもたらす心理的影響と媒介的機能

東京大学大学院新領域創成科学研究科
自然環境学専攻
講師
中村　和彦

音楽には様々な演奏形式が存在するが、その起源には当時の社会状況が反映されている。例えば、１声部に１人の独奏者を配して数名が重奏する演奏形式である室内楽は、16世紀における王侯貴族の館での演奏が起源とされる。この室内楽をはじめとする屋内での演奏は、いわゆるクラシック音楽の主要な演奏形態として、その社会的・時代的文脈からほとんど解き放たれた現代まで頻繁に、もはや当たり前のように行われてきた。しかし、先のコロナ禍により一時的に屋内での演奏が社会的に断たれたため、クラシック音楽の演奏家たちが屋外における演奏の可能性を模索する機会が生じた。

そのような折、NHK交響楽団所属の弦楽器奏者らが、2020年８月に東京大学富士癒しの森研究所の森林内において室内楽形式の演奏を試行した[1)]。その後、従来の屋内演奏が社会的に再開されて以降も、同奏者らによる同地での森林内演奏は毎年度継続して実施されている。富士癒しの森研究所では、前身の富士演習林として1925年に設立以降、約100年にわたり学術的な知見に基づく森林管理が継続されており、特に現在は「癒し」に関する研究のための森林空間が整備されている。こうした快適性の高い森林空間の存在が、伝統的な室内楽の演奏形式を屋外に持ち出すことを可能とし、結果として森林と音楽の双方にとって新たな価値創出が示唆される活動が生まれたと捉えられる。

そこで今回の助成による研究では、この森林における弦楽器演奏を事例として、森林空間における音楽演奏という事象がもたらす演奏者および聴衆への心理的影響を明らかにし、人々が生活の中で屋外空間をより豊かに楽しむための媒介的機能という音楽の新たな価値について考察することを目的として、実証実験を進めている。具体的には、森林空間（屋外）と音楽ホール（屋内）で、同演奏者・同編成・同曲目での音楽演奏を行い、演奏者および聴衆の心理状態を質問紙調査およびインタビュー調査により比較検討する。

前述のNHK交響楽団所属奏者の弦楽三重奏（Vn. 大宮臨太郎／ Va. 坂口弦太郎／ Vc. 山内俊輔）による森林内演奏は、これまで2020年８月、2021年６月、2022年７月の３回にわたり実施された。これらはいずれも、付近の道路を走行する車両のエンジン音が日中に比べて少ないことを見込んで、早朝あるいは夜間に時間帯を設定して行われた。これらを踏まえて今回の助成による研究について同氏らと相談した結果、早朝の時間帯における『ゴルトベルク変奏曲』（J.S.バッハ作／弦楽三重奏編曲版）を演奏することとなった。これを受けて、森林空間（屋外）における演奏は、2023年７月16日（日）午前６

図１　森林空間（屋外）での音楽演奏

図２　音楽ホール（屋内）での音楽演奏

時より、東京大学富士癒しの森研究所（山梨県山中湖村）の森林内にて行い（写真１）、約200名の聴衆が参加した。これにできるだけ合わせる形で、音楽ホール（屋内）における演奏は、2023年10月９日（月・祝）午前10時より、オーキッドミュージックサロン（東京都世田谷区）のホールにて行い（写真２）、約30名の聴衆が参加した。本稿では以下、これらの実験演奏の結果速報として、演奏者への影響と聴衆への影響について、アンケートおよびインタビューから読み取れたことを定性的に紹介したい。

演奏者は元来、自身の演奏に対して聴衆がどのような聴き方（反応）をしているかについて、とても敏感であり、随時それを感じ取りながら演奏をしている。屋内演奏では、聴衆があまり演奏に興味を示さなかったり、ともすると寝入ってしまったりすることもあるが、こういった聴衆の反応は当然ながら演奏者からしても辛いようである。しかし、森林内での演奏においては、聴衆が退屈することなく気持ちよさそうにしていたため、演奏者としても心地よく演奏できたようだった。これは森林空間の心理的

影響が聴衆を介して演奏者にも波及したと考えることができる。また、今回の演奏者各氏は、これで計４回の森林内演奏を経験したことになり、環境や響きの特性に慣れたてきたことも窺えた。そのこともあってか、来年度は森林内演奏を年に１回だけでなく２回とし、早朝の『ゴルトベルク変奏曲』は軸として継続しつつ、他の時間帯に他の曲目を演奏することも検討したい旨の発言も出るなど、森林内演奏に対して室内演奏とは異なる魅力を演奏者として感じていることが読み取れた。このことから、演奏者の森林認識に対して演奏が媒介的機能を果たしていることが示唆される。

聴衆については、森林内演奏において「演奏に対して何を感じたり、行動したりしたか」と「森に対して何を感じたり、行動したりしたか」の２つの質問に対して自由記述で回答してもらったところ、演奏と森が相互に分かちがたく一体化していることを示唆する回答が複数見られた。特に前者の演奏に関する質問に対しては、

- 鳥のさえずりと朝日こもれ日がうつろう様子と音色の変化が相まって感動しました。
- お日さまと鳥と森林との一体感を感じた。
- 森の中で弦楽器の響きが、やわらかく共鳴して、音楽が心の中に入りました。
- 鳥のさえずりと演奏のコラボレーションが何とも言えない美しさを感じました。
- 静かな朝の森にふさわしい選曲と演奏で日頃感じていなかった森の良さが心を打った。
- アコースティックな楽器の音は自然音と調和する。コンサートホールの演奏会よりみんな（聴衆）楽しそう。空調の効いたホールで奏で聴くことで、私たちは、音楽の何か大切なものを忘れかけているのかもしれない。
- 森の木々のにおいと奏でられる音と新緑の色とが一体となってコンサートホールで聴くよりも肌で感じられてよかった。

などの記述がみられ、森林空間が聴衆の演奏聴取に各種の心理的影響を及ぼしたことが読み取れた。また､後者の森に関する質問に対しても、

- 鳥たちも気持ち良さそうに演奏をきいていたと感じました。森と一体となっていたように思いました。
- 森と鳥達と共に音楽を聴けた。
- 少しずつ日がさしてくるようすを音楽のうつろいと共に感じた。
- 自然の中でできることは自分が思っているよりたくさんあるのだろうと感じた。

などの記述がみられ、聴衆の森林認識に対して演奏が媒介的機能を果たした部分があったことが読み取れた。屋内演奏においては、聴衆にとって演奏を聴く以外の行動は実質的に制限された状態となるため、当然ながら演奏以外に対する具体的な記述は見られなかった。

以上のように、今回の助成による研究に際して仮説として想定していた、森林空間での音楽

**図３　森林空間と音楽演奏により相互補完的に示唆される両者の新たな可能性**

演奏がもたらす心理的影響と媒介的機能は、演奏者と聴衆のいずれに対しても定性的に認められた。このことは、音楽演奏・聴取の新たな形式の可能性を示唆すると同時に、森林空間のさらなる活用可能性を示唆するものでもある（写真３）。森林の空間的活用という点では昨今、ともすると心身の回復効果（森林セラピー）に主眼が置かれがちであるが、森林は古くから音楽をはじめとする芸術活動における霊感の源でもあったように、まだ科学的に記述できていない多様な側面があると考えられる。今後、森林空間の新たな活用可能性を学術的に見出すことを目指して、従来の森林科学における森林空間の呼称である「林内」を援用し、森林空間における室内楽形式の音楽演奏を「林内楽」（りんないがく）と称して、引き続き実施していきたいと考えている。

## 文献

１）齋藤, 森の中での音楽会・文化祭の試み, 森林レクリエーション, 424, 4 − 8, 2022.